
過疎地域で域外大学生による地域の一員としての 活動を促す「週末住人モデル」の構築

松浦 生（鳥取県大山町）

2025年2月4日

1. 自己紹介

松浦 生 まつうら いくる



- 東京都日野市生まれ（28歳）
- 公立鳥取環境大学環境学部卒
- 在学中に「もちがせ週末住人」設立
- 鳥取県大山町地域おこし研究員
- (株)週末住人 設立
- 慶應義塾大学SFC研究所 上席所員

2. 大山町



大山町観光協会HPより引用

2. 大山町



- 人口 約1万5千人
- 農業・観光業
- 標高0m～1,729m
- 「楽しさ自給率の高いまちへ」
- 地域自主組織
- 超住民参加型テレビ
- 協力隊の高定着率 など

3. 実践事例

■もちがせ週末住人（週末住人モデル1.0）

鳥取市用瀬町（人口約3,300人）で2016年から実施。近隣大学生が週末（一部は毎日）に居住し、「週末住人の家」を民泊施設として運営することで、全国各地から大学生の滞在受入れを行っている。コミュニティメンバーは約200名（2025年1月現在）で、9割は学生時代から継続的に関わっている。約50名が近隣在住、約150名は県外在住となっており、集落行事や地域行事への参加や、自主プロジェクトの企画回数の累計は100回を超えている。



集落への参加／地域イベント
の参加／プロジェクト企画



交流イベントの実施



オンラインコミュニティ

3. 実践事例

■だいせん週末住人（週末住人モデル2.0）

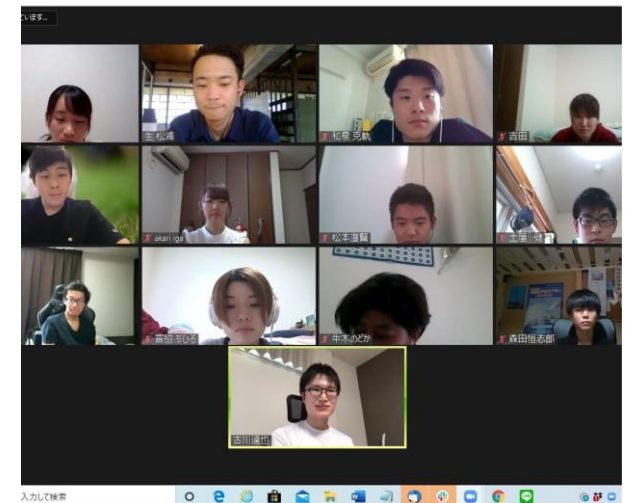
鳥取県大山町で2019～2021年にかけて実施。大学からの距離が遠く、近隣に住んでいる大学生が居ない地域での実施のため、半年～1年のプログラム型で各期の参加者を募集し、地域づくりに関わる人や組織との関係づくりと、参加者それぞれの興味関心に基づいたプロジェクトづくりを支援している。1期10名、2期6名、その他途中参加を合わせて累計24名が参加し、子ども食堂スタッフ、コミュニティカフェでの一日店長、小中学生の学習支援、ドローンによる映像撮影などの活動を行った。



集落への参加／地域イベント
の参加／プロジェクト企画



交流イベントの実施



オンラインコミュニティ

3. 実践事例

■株式会社週末住人（週末住人モデル3.0）

若手社会人と地域との関係づくりにも挑戦



地域とつながる
拠点・交流事業



鳥取とつながる
Z世代コミュニティ事業



食を通じて鳥取と
つながるEC事業



Z世代の視点を活かす
受託・協業事業

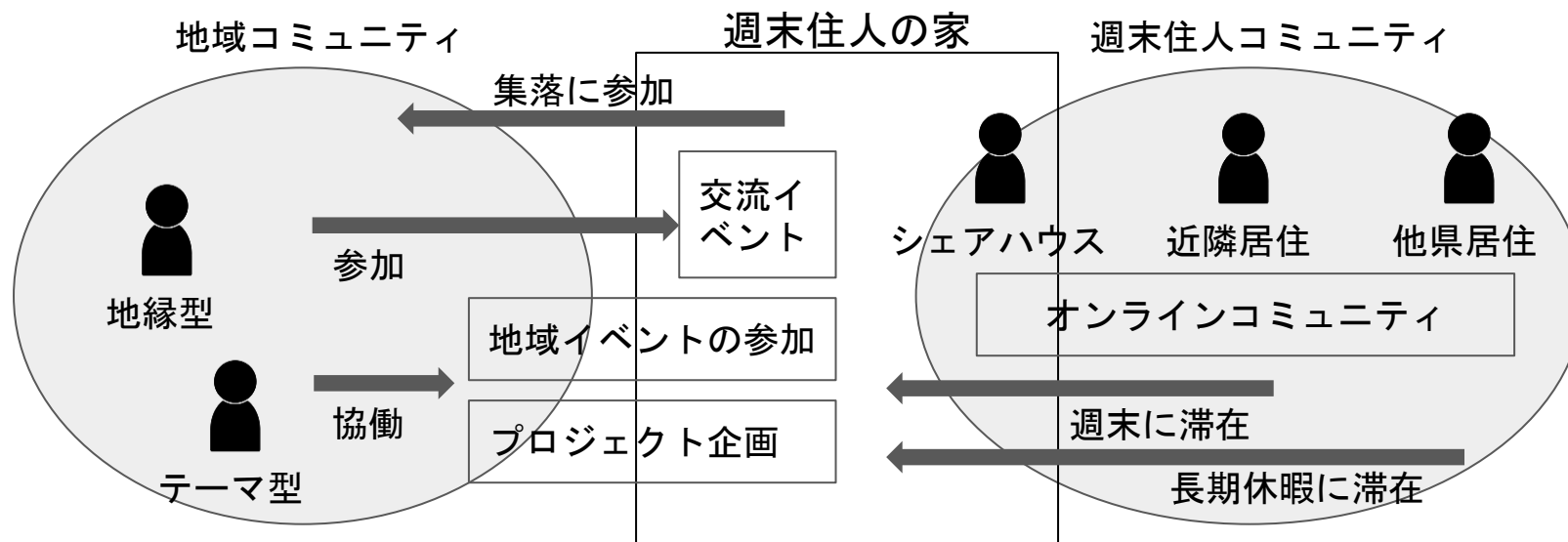
4. 週末住人モデル

■目的

人口減少により地域の担い手不足が深刻な地域において、地域外の若者が余暇時間（週末など）に地域に滞在し、地域の一員として活動する（住人となる）ことを支援することで、若者と地域の持続的な関係づくりを実現することを目的とする。

■概要

地域コミュニティに根差した滞在拠点「週末住人の家」を起点に、オンラインを含む若者コミュニティを形成し、地域との関わり方の多様性を担保することで、若者の関係人口を創出する仕組み。



5. 背景と課題

■背景

過疎地域では、特に進学流出によって若年層が著しく少ない人口構造となっている。それに伴って、地域内の子どもたちの将来のロールモデルとなるような若者との交流機会、地域活動に若者が参画する機会、企業や組織が若者と関わり採用や事業創造をする機会など、地域の将来を見据えて重要な**若者との接点となる様々な機会の損失**が起きている。

一方で、地方出身者のUターン希望率は鳥取県では概ね7~8割と非常に高い水準となっているなど、故郷と感じられる場所がない「ふるさと難民」と言われる人たちも含め、**地方地域に関心を持ち学生時代から様々な活動を行う若者は増加している。**

■課題

若者の存在が地域づくりや町内の子どもたちのキャリア教育、次世代人材の獲得など、地域の側にとって重要であり、一方で若者の側も地域での活動に意欲的な人が増えているにも関わらず、「受入れ疲れ」や「過度な期待・意識ギャップ」など**持続的な関係づくりの課題**や、「移動・滞在コスト」「コーディネーター設置」など**持続的な仕組みづくりの課題**がある。

「週末住人モデル」では、滞在拠点を起点に「若者コミュニティを醸成する」アプローチによって、地域コミュニティとの持続的な関係づくりを実現するとともに、地域住民や若者同士の「自発的協力」によって移動・滞在コストやコーディネーターなどのコストを低減化することができる。

6. リサーチクエスションと仮説

RQ1.

(受入れ疲れや期待値ギャップを生まない)
持続的な関係づくりのプロセスとは？

仮説1.

地域の方との&若者同士のコミュニケーションを通じて、関係人口となる若者が「地域の一員」として活動するに至るには、意識と行動に段階的发展があるのではないかな？

RQ2.

必要な仕組みは何か？
その仕組みを持続的に運用するためには？

仮説2.

基盤として①滞在拠点、②移動支援、③コーディネート機能があり、持続的運用のためには、「自発的協力」を促すコミュニティづくりが重要ではないかな？

検証

先行実践「もちがせ週末住人」からモデル構築をして、鳥取県大山町で実装し有効性を実証

7. 持続的な関係づくりのステップ

■必要なコーディネート機能を明確化

大学生が地域をフィールドに行う活動では、しばしば「受入れ疲れ」や「期待値ギャップ」といった課題が生じ、活動が持続的に行われないという課題がある。週末住人モデルでは、特に大学生側の意識と行動の変化に着目し、持続的な関係づくりの4ステップを明らかにすることで、関係づくりの進度に応じて必要なコーディネート機能を明確にしている。

(情報獲得のパターン)		(行動内容のパターン)		コーディネーターの介入が必要		コーディネーターの役割は限定的	
				A 偶然ばったり・ コーディネーター に同行	B コーディネーター が提案・直接紹介	C 地域アクターや他 の参加者の紹介	D 自ら希望して 連絡・企画
外的な成果はない	a	【一般に開かれた地域の「場」への訪問】		Aa	Ba	Ca	Da
	b	【地域に開かれたイベント・地域行事への参加】		Ab	Bb	Cb	Db
	c	【地域コミュニティ内・アクター間の会議等への参加】		Ac	Bc	Cc	Dc
	d	【特定の地域アクターの訪問】		Ad	Bd	Cd	Dd
外的な成果がある	e	【地域アクターの仕事・企画の手伝いや体験／他の参加者の活動サポート】		Ae	Be	Ce	De
	f	【自身の興味を基に地域の場でイベント／プロジェクトを企画実行】		Af	Bf	Cf	Df

持続的な関係づくりには、①「参加」→②「自発的参加」→③「周辺の役割行動」→④「主体的活動」の4段階が重要であり、これをサポートする地域のキーマンへの働きかけ、および学生コミュニティの形成が、コーディネート機能において重要である。また、行動を4段階で評価することで、一定の効果測定も可能となる。

8. 必要な機能

	週末住人モデル1.0	週末住人モデル2.0	週末住人モデル3.0
タイプ	学生／居住型	学生／プログラム型	若手社会人／PJ参画型
地域条件	・ 鳥取市用瀬町 ・ 人口約3,300人 ・ 集落と徒歩圏内の地域コミュニティでの実施	・ 鳥取県大山町 ・ 人口約16,000人 ・ 地域づくり団体や事業者などとの実施	・ 鳥取県全域 ※用瀬町・大山町を拠点 ・ 人口約5万6千人 ・ 事業者などと実施
機能1：拠点	シェアハウス・体験型民泊	ホームステイ・空き物件	※実証中
機能2：移動	総務省ふるさとワーキングホリデー、鳥取県ワーホリ支援事業を一部活用	交通費補助、町内移動支援	※実証中
機能3A：コーディネーター	コミュニティコアメンバー・地域キーパーソンが協働	地域おこし協力隊・地域キーパーソンが協働	※実証中
機能3B：地域キーパーソンの紹介	集落に参加／シェアハウス居住者を中心に関係性を維持・発展させ、生活の中で紹介	動機に基づいて、キーパーソンに初期段階で紹介し、関係づくりを継続的に支援	※実証中
機能3C：若者コミュニティ	定期的な交流イベント／オンラインイベント	キックオフ合宿／オンライン交流会	※実証中